

五、東欧をたずねて

週末をローマで送った私は、十月十九日の夜、ブルガリアに向った。私にとっては初めての社会主義圏への旅である。ソ連製のターボ・ジェット機は、ユーゴの夜空を横切つて二時間の後ソフィアに着いた。街は、広くて清潔であつたが、何となくうす暗かつた。

翌日は、ジフコフ首相をはじめ関係閣僚をたずね、夕刻にははるかにソフィアの市街を見下ろす郊外の山やブドウ酒工場を見学した。郊外の山麓には指導者の別荘が散見された。至るところの街角にレーニンの肖像やその百年祭を祝う立看板が見られた。東欧圏の中でも最も親ソ的な国らしい。大阪の万国博に率先参加したこの国は、小麦や葉たばこの買付増加を希望し、コンピュータや機械類の導入に異常な興味を示した。迎賓館でとつた食事は簡素ではあつたが、接遇は周到で親切であつた。

二十一日朝、私は空路ブタペストに向つた。広い耕地を縫つて流れる長蛇ちよつたのようなドナウは、

薄日を浴びてにぶく光っていた。古都ブタペストは、昔の栄華を物語る豪華な建築で装われているが、「ドナウの真珠」といわれたこの都も、今では石炭のばい煙で幾分くすんで見えた。かつての独ソ戦で破壊されたこの街も、その修復を終え、ところどころに西側資本との提携にかかるホテルの建設が進んでいた。

一九五六年の動乱で七万にのぼる抵抗の血が流されたが、だれもそれを口にしようとはしない。清楚で学者のような風貌をしたフォック首相は、ハンガリーのガット加盟への支援を求め、気さくで野性味の温れたピロー貿易相は、通商航海条約の締結と日本・ハンガリー貿易の倍増を希望した。昼は郊外の国营工場を見学したが、設備は古く、モザイクな総合工場で専門化は未だしの感じがした。夜はピロー大臣夫妻と共に日本を訪れたこともあるジプシーの音楽を鑑賞し、その哀歎に浸った。

次に訪れたのはポーランドである。首都ワルシャワの秋はたけなわであった。街路を飾るマロニエの並木はすっかり紅葉していた。去る大戦で瓦礫の山と化したこの都も、立派に復旧している。しかし、至るところの壁に今なお弾こんが見られるのは、何としても痛ましい。

八十年來のかんばつでこの国の経済計画は新しい困難を背負い込んだ形だ。温容を巨軀で包み、

圧倒的な国民的人気があるというチランケビツチ首相は、他の閣僚と共に、日本・ポーランドの技術協力の必要を強調し、粘結炭や銅の開発、更には港湾改修等に対する信用の供与を希望した。午後はこの国が誇るシヨパンの生家を訪れた後、郊外の離宮にドライブし、王朝時代の生活と芸術を偲んだ。

十月二十四日の夜、私はプラハに着いた。そのころチェコでは、あいにく党と政府の首脳は訪ソしていた。彼等がソ連からどういう新しい協定を持って帰るかに国民の神経が集中してあるようであった。それでも若いフルシコビツチ副首相以下の閣僚やプラハの市長等は、精一杯の歓迎を通じて、日本に対する関心と理解を示してくれた。東独と並ぶ工業水準を誇るこの国である。話は当然、科学技術の情報交換や日本・チェコ合弁企業による第三国市場開拓の可能性に向けられた。プラハの町は、神聖ローマ帝国以来の遺跡を殆どそのまま保存することに成功している。チェコの人々は、かつての栄光を誇ってはいるが、なんとなく暗い現在をもてあましているようだ。東欧のソ連に対する依存は、安全の面ばかりではない。貿易面における対ソ依存も、おしなべて三割ないし五割の比重をもっている。しかし、コメコンに統合的な機能をもたせようとする提案や努力がいくたびかなされたが、未だ実効を収めるまでに至っていない。EECの曲りなりの進展に比して、いささか遜色がないとはいえない現状である。そして、その前途も必ずしも明る

いとはいえないようだ。

東欧諸国は、ソ連依存と同時に西欧への傾斜が、心理的にも経済的にも根強いものがある。ソ連も、自己の安全に大きい脅威にならない限り、あえて強圧を加えて西側との交流を引止めようとはしていないようだ。国民の消費生活は原則として自由であるし、土地や住宅の私有も一定の限度で認められている。経営の自主性と能率の向上を目ざす新経済政策も、各地で逐次実行に移されている。宗教も根強い力を持ち、ポーランドやチェコは、今でも世界で最も強いカトリックの国であるといえよう。

東欧人のすべてにとって、ソ連は心の底から好きな国とはいえないようだ。といってこの国からの離反を考えている気配は見出しにくい。西欧に魅力と郷愁を覚えてはいるようだが、それへの傾斜には、節度を失わないように心がけている。いわば、確たる方向への意欲ではなく、両者間に立つての「平衡感覚」の保持が、東欧の生存と安全にとっての現実のよりどころであることを知っているからだと思う。

東欧はどこへ行く、という課題の解明はむずかしく、私の力量の及ぶところではない。歴史は、もともと盲目であるが、東欧の歴史は、とりわけ波乱に富んだものであった。その間を縫って東欧人は、その生存を支える平衡感覚を失うことなく、今日もそれぞれの個性的生存を続けておる。

現在、東欧人の間に勤勞意欲の減退を嘆く声がある。しかし、確たる方向性をもたないところに旺盛な民族的活力の展開を期待するのはむずかしいことだ。ただ確かなことは、東欧には今、戦争がないということである。ワルシャワの離宮に、戦いの神が休息しているかたわらで、ポランド人がだんらんしている像が据えてあつた。私には、それがまさに東欧人の切実な願いをこめた憩いを象徴しているように思われたのである。

(昭、四四・一一・四「朝日新聞」)